

氏 名 宮 岡 伯 人
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学位記番号 論 文 博 第 346 号
 学位授与の日付 平 成 10 年 5 月 25 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 A Grammar of Eskimo: The Central Alaskan Yupik Language
 (エスキモー語文法 — 中央アラスカ・ユピック語)

(主査)

論文調査委員 教授 庄垣内正弘 教授 吉田和彦 教授 佐藤昭裕

論 文 内 容 の 要 旨

極北のグリーンランド、カナダ、アラスカ、北東アジアに分布するエスキモー語には、たがいに通じない六つの言語が認められるなかで、それなりに研究の蓄積があるのは、グリーンランドのエスキモー語だけである。他については、宜教師などがヨーロッパ古典語文法の籓に嵌めこんだ簡単な文法はあっても、当の言語に内在する理法を掘り起こした包括的な文法は書かれていない。本論文は、エスキモー語のなかでも古拙的（ときには古層的）な特徴を随所にとどめている中央アラスカ・ユピック語（以下、ユピック語と略記）の、音声・音韻法、形態法、統語法を可能なかぎり網羅的に扱い、併せて、この言語を特徴づける、きわめて稀な型の複統合性が依っている形態法的機構をも闡明せんとした記述文法である。無文字言語の研究、その分析と記述は、不可避免的にフィールド調査に依拠せざるをえないが、本論文では、論者が作成と普及にかかわった当該言語の正書法によって近年、筆録されはじめてきた口承文法なども一部に利用されている。

論文は九章からなる。序章では、系統分類、分布、方言、現状、記述史などが簡潔に概観され、第二章では、第三章以後の本編でなされる分析と記述にたいする予備的情報があたえられ、敬語表現や間接的表現への強い志向、死者名忌諱(hlonipa)や成人名忌諱(teknonymy)などのような社会言語学的現象の文法的問題にも説きおよぶ。本編は、音声・音韻法(第三章)、名詞類(第四、五章)、動詞(第六、七章)、不変化詞(第八章)、統語法(第九章)の順に記述がすすめられる。名詞と動詞にかんする第四章から第七章までの四章はひとまず形態法として分類できる。

まず、本編の導入となる第二章では、同言語の基本的な性格が、形態法的にみると、①頑ななまでに接尾法のみ依存し、②きわめて膠着的であり、③語の統合度のいちじるしく高い複統合型(polysynthetic)言語であること、形態・統語法的にみると、④おおかたの言語では統語法によって操作される現象の多くが、語つまりは形態法に委ねられて、そこに複雑な統辞法(即ち内的統語法internal syntax)を発達させ、⑤義務的文法関係の標示を主要部と従属部の双方においてなす二重標示型(double-marking)をとり、⑥基本的な文法格の標示が部分的に能格的な(split ergative)言語であることに求められている。なかでも、③の複統合性およびこれと相関する④の複雑な統辞法は、類型論上、一つの極として古典中国語がその典型として引かれる孤立型言語とは、対蹠的な極にユピック語を位置づけているとみる。このような類型論的性格づけがなされるユピック語では、文法の中心はあくまでも語におかれざるをえない。本編の紙幅のほぼ四分の三が上記形態法の四章で占められている(のにたいし統語法が形態法の十分の一の長さしかない)のは、このためである。

語を形成する手法は単純かつ斉一的である。派生接尾辞(postbases)と屈折接尾辞(ending)の二種が区別される生産性の高い接尾法に依拠するのみで、おおかたの言語で利用されている複合法(compounding)も重綴法(reduplication)も知らない。しかもその接尾辞は、自立的な語幹と語源的にまったく関係づけられない純然たる、非自立的な接尾辞である。語形成の様式じたいは単純至極なのにたいし、語が担いうる機能の幅はきわめて広い。一方では、典型的な孤立語のように一語一形態素のこともありうるが、他方では、多くの形態素の結合が多彩絢爛な語をうみ、語意の粘稠度はおのずとたかまる。語は静的な構成物にとどまらず、動詞であれば文的な小宇宙を形成する。文の生成とはもとより同じではないにしても、

それに幾分近づくと自由度が語の形成に与えられているのである。これ即ち、語幹に機能の異なる数多くの派生接尾辞をつぎつぎと後続させることによって、具体的あるいは抽象的な意味の幾重もの修飾、語類（名詞類あるいは動詞）の幾度もの変換、名詞項（nominal argument）の添加・削除とそれに伴う幾層もの埋め込み構造化などといった、一般の言語では、複数の語を組み合わせて行うさまざまな統語的操作を、一つの語の内部で統辞的に行うからである。このようなユピック語は、語幹と他の形態素の語内部での相対的位置関係が固定的に定まっているが故に「位置的分析」の適用しうる、一般に複統合型とされている言語とも、趣をおおいに異にした言語であると言わざるをえない。

本研究では、ユピック語の音声・音韻法、形態法、統語法の総括的な記述をすすめるその過程で、かかる特異な複統合性の依っている形態法的機構の闡明にも努力が払われ、敬語性や表現の間接性の形態法的顕現にも目をむけている。

本編のうち、第三章では、まず、表層対立によって定義される表層の音韻表示（phonemic representation）を基底の音韻表示（phonological representation）から導く音韻規制、ついで、前者に被さって付与され、形態法的単位としての語に統一（かたち）を与える音律規則が提示され、最後に音声の実現形が説明される。

第四章は、名詞的語幹と名詞的派生の分類と記述である。名詞的語幹のなかで特徴的なのは、ユピック語発話のなかに頻出する豊富な（三十種の）指示詞であるが、話者の空間認識の基盤としてはたらくその体系は、十二の領域を区別し、これに点（静止）と広がり（左右の動き）、ならびに遠近の対立が被さっていることを明らかにした上で、その用法を説き、この民族の生態適応との関連性にも触れている。名詞的派生は、動詞的語幹から名詞的語幹を派生するものと、名詞的語幹に意味的修飾を施すものとに分かれる。それらの多様な用法のうちで、前者の語類変換をなす派生接尾辞の一部（動名詞化接尾辞）が、名詞的語幹から動詞的語幹を派生する第六章の若干の接尾辞（繫辞的）と相前後して生起することによって、名詞から出て名詞に、動詞から出て動詞に回帰する、論者のいわゆる回帰的派生（cycled expansion）は、基本的意味関係には変更をもたらさず二次的範疇化の含意のみをうむ重要な形態法的現象であることを明らかにしている。

ついで第五章は、名詞的屈折を扱い、その屈折接尾辞に標示される文法範疇である数、人称（所有者）、格の用法を記述する。七つの格があるうち、絶対格と関係格の二つが文の基本的文法関係にかかわる統語的な格であって、その関係格は、属格および能格として機能すること、能格言語として一般に知られているエスキモー語の能格が、すくなくともユピック語の場合、三人称にのみかかわる部分的能格でしかないことがしめされている。

第六章は、動詞語幹と動詞的派生の分類と記述である。ユピック語は、名詞類と動詞類が形態法の複雑度に大きな差を示す言語ではないが、語のなかの語、即ちverbumとしての動詞は、文法の中核であることにかわりはなく、文法現象の殆どが動詞とりわけ動詞語幹の種別と直接間接に結びついている。その動詞語幹は、関与する名詞項の数と種類、ヴォイス（態）変換の違いに着目して分類がなされる。動詞的派生は、名詞的語幹から動詞的語幹を派生するものと、動詞的語幹に意味的修飾、統語的変更を施すものとに分かれるが、とくに後者の派生が、さまざまな文法範疇の指定、名詞項の添加、埋め込み構造化などを担って、ユピック語の複統合性にもっとも深くかかわっているさまが巨細にわたって記述されている。

ついで第七章は、動詞的屈折を扱い、その屈折接尾辞に義務的に標示される文法範疇としての人称（主語と目的語）ならびに法の用法を精査しているが、法は、とくに時制・アスペクトやモダリティとつよく結びついているために、記述は、特定の派生接尾辞や不変化詞との共起関係に注目しながらすすめられている。

第八章では、さきに扱われた名詞類と動詞とは対照的に、屈折変化のない語類、即ち、不変化詞（小詞）が取りあげられる。この種の語類の常として、機能的に多様なばかりか、情緒性が纏綿し、捕捉しがたい陰影で隈取られたものも多い。屈折にくわえて、派生も限られているので、形態法上の問題はすくないが、かえってそのことが分類と整理を困難にしている。

第九章は、文における語と語の関係性にかかわる統語法である。すでに明らかなように、ユピック語では、内的統語法、即ち、語内部の問題として形態法の一部をなす統辞法の著しい発達と相関して、文法構造全体における統語法への負荷は比較的軽い。二重標示型言語であるために、語順の自由度はたかいが、SOV型への志向が微弱ながら認められ、語用論的条件がそこにはたらく。もっとも重要な統語法の問題は、ヴォイス変換と関連する名詞類への格付与の問題である。これにたいして論者は、動詞に本来に関与する名詞項と派生によって添加されうる名詞項が一定の階層をなしており、その階層にしたがって名詞項の昇格と降格、ならびに格付与が規則的に生じることを明らかにし、同時に、どの名詞項が最高位としての絶対格をとって前景化（foregrounding）されるかについて、形態・統語的条件とともに語用論的要因の関与を論じている。

論文審査の結果の要旨

エスキモー語は、その類例の少ない特徴的な構造のために、言語類型論や形態論研究の中でしばしば取りあげられ引用されてきた。しかし、グリーンランドのエスキモー語を別にすれば、語彙や文法にかんする記述資料の蓄積は少なく、信頼できる詳細な文法は皆無といってよい。本論文はエスキモー語族を構成する6言語のひとつである中央アラスカ・ユピック語の音声、形態、統語の各構造面についての包括的な記述文法である。

類型論的にみると、エスキモー語は、しばしば中国語が典型とされるいわゆる「孤立語」とは対極的な、いわゆる「複統合語」である。つまり語の統合度が極めて高く、形態法的単位としての語は、「孤立語」と同じように一形態素からなることもあるが、ふつうは多くの形態素の連続からなる。この統合性を著しく高める語形成は、おおむね規則的な、そのかぎりでは膠着性の高い接尾法のみにも頼っている。ほとんどの言語で多用される複合法や重複法が用いられることはない。

語の形成法の偏りもさることながら、エスキモー語の複統合性は極めて特徴的であり、一般に「複統合的」とよばれているほかの言語とは大きく異なっている。ひとつの語の内部で動詞と名詞の転換が派生接尾辞によって一再ならず生じうるし、名詞類だけでなく動詞も、統合度の高い語となりうる。また屈折接尾辞によって動詞の中で基本的な統語関係が標示されるために、動詞は単独で文になることもできる。しかも、単一の語でありながら、幾層もの節が埋めこまれた複雑な文に匹敵する構造をもつこともできる。このために、語形成はかなりの程度まで文の創出に似た生産性をもつ。パラダイムをなす形態素の一つひとつを一定の順序と位置にはめこむ、他の複統合的な言語とは大きな異なりを示す。また、「複統合語」といえない言語が文レベルでおこなう文法的処理の多くがエスキモー語では語レベルに委ねられているために、統語法というよりも「統辞法」(内的シンタックス)の占める文法的役割が際だって重要な言語であるということが出来る。

無文字言語の必然として、資料蒐集と記述研究はフィールド調査を基礎においた音声面の解明からはじまる。その上で「語」の構成を扱う形態法、ついで「文」の構成を扱う統語法に進むことになる。本論文においても、序論(1章)と言語構造の予備的解説(2章)の後、音声の実現を含む音韻法と韻律法(3章)が記述され、名詞の派生と屈折(4, 5章)、動詞の派生と屈折(6, 7章)、不変化詞(8章)、統語法(9章)が続くという構成になっている。しかし対象言語の上述のような構造的性格のために、記述の中心は自ずと形態法に置かれることになる。英文約1,000ページ[執筆要項指定A4判ダブルスペース換算]の約7割を形態法(4~7章)が占めているのはこのためである。

本論文はエスキモー語の包括的な文法として、上記の章立てにしたがって、各面の記述分析が巨細にわたり丹念に進められている。記述対象のデータは近年、現地で流布をみることになった正書法で書かれた文字資料が一部利用されてはいるものの、ほとんどが論者自らの30年に及ぶ現地調査から得られたものである。論者の調査が極めて慎重におこなわれ、言語現象の細部にまで機能的・意味的差異を解き明かしていく努力のなされていることは、本論文の随所にうかがうことができる。論者の記述には、データに非常に忠実で、既成の理論の枠を先行させるのではなく、むしろ当の言語に内在する理法を掘り起こすことによって文法構造の深奥に迫ろうとする一貫した姿勢がある。

そのような研究姿勢の中から、混沌とした言語現象の背後に潜む確固たる秩序を見いだした例はつぎに示すように、1. 音声、2. 形態、3. 統語の各面から引くことができる。

1. 語は必要に応じて生産的に創出されるが、そこに含まれる形態素に語という形態的纏まりを与える特徴のひとつは、長母音化と重子音化などとして実現するアクセントの付与という韻律的な現象としてあらわれる。論者はかつてこれが弱強型韻脚(iambic foot)の形成、一定の音節連続の回避、語境界の標示といった要因によるものであることを明らかにした。韻脚が音声現象の解明にたいして果たす役割は以前から論者によって提案されていたが、本論文でその記述が一層精緻化されたかたちで示されている。

2. 形態法にかかわるエスキモー語の大きな特徴のひとつは、その能格性である。能格的(非動作者的)2項動詞が必要とする「逆受動形antipassive」が、被害者・受益者動詞体系の中に位置づけられるべきことを、中・受動化過程に着目して掘り起こしている。言語構造にたいする慧眼のもたらしたこの認識は、能格言語の類型論的研究にも資するところが大きいと考えられる。

3. 形態法と統語法にまたがる現象としては、基本的には能格型の名詞の格指定がある。しかしこの言語の動詞は、上述

のような、幾層もの節が埋めこまれた複雑な文に匹敵する構造をとる場合、そこに数多い名詞項が関与することになるために、表層的な能格型の格指定によっては説明することができない。論者は、名詞項と格それぞれの階層を認定し、これにしたがった格指定の型を明らかにし、その上で、各名詞項が示す格の変転現象を広義のヴォイス（態）の問題として語用論的要因の関与を説いている。

文法記述はおろか言語資料の蓄積すら十分でなかったこの言語について、フィールド調査によって文法の全ての面の詳細な事実を掘り起こし、その特徴的な諸性格の掘ってくることを解明しつつ纏めあげられた本論文は、エスキモー語研究の基礎を固める包括的な文法記述としての大きな成果といえる。また、対象言語の構造的性格がほかに類例のほとんど知られていないものであるだけに言語類型論や形態論の一般的研究に寄与するところは少なくない。また、この複統合的言語のとりわけ複雑な形態法の機構を解明したことは、近代言語学がまともに向き合うことを避けてきた傾向のある「語」についての認識をあらためて問い直させる可能性を提供したともいえ、その意義は大きい。

本論文は、すでに述べたように対象言語の各面を詳細に記述した大部の文法であるが、記述に手薄な部分あるいは偏った部分、さらに簡潔性に欠ける部分も若干みられる。しかし、対象とする言語の研究の歴史は浅く、資料の直接的な蒐集から文法構造全体の分析と記述までを一人あるいはごく少数の研究者で進めなければならない状況のもとで、このような不十分な点の生じることはやむをえないことであろう。これらは論者の今後の継続的な調査研究によって補われ、さらに精緻な記述文法の完成されることが期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、1998年4月28日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。